埼玉県の IPM 実践指標（ダイズ）　（平成 22 年度策定、令和 2 年 9 月改定）

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
排水対策 土壌の過湿による病害や湿害を回避し、健全な生育を確保するため、ほ場の排水改善をはかる。	部分深耕機やサブソイラ等による耕盤破砕を行う。	1			
	ほ場周囲への明渠施工をする。	1			
土づくり	未熟な堆肥や有機質肥料を用いず、完熟した良質の堆肥を用いる。	1			
	苦土石灰のほか、ようりん等のリン酸質資材を積極的に施用し、土壌改良につとめる。	1			
ほ場衛生 土壌病害虫やウイルス病のほ場外からの持ち込みを防止する。	土壌病害虫の伝搬防止をはかるため、トラクタやロータリ耕うん爪などの洗浄・清掃を十分に行う。	1			
	虫媒伝染性のウイルス病感染を防止するため、ほ場周辺の雑草（マメ科、ナス科など）を除去する。	1			
土壌病害虫の抑制 黒根腐病やシストセンチュウなど、連作に伴って多発しやすい病害虫の密度抑制をはかる。	連作を避け、他作物との輪作体系を組む。	1			
	ブロックローテーション等により、夏期湛水を行って土壌病害虫の死滅をはかる。	1			
雑草の抑制（作付前） 雑草との競合を避けるため、事前にほ場の準備を行っておく。	湛水可能な場合は前年夏期に湛水し、ほ場の残存種子の死滅をはかる。	1			
	前作物栽培終了後、生残している雑草を事前に除草する。	1			
健全種子の利用	採種ほ産種子を用いる。	1			
品種の選定	在来品種などの銘柄品種以外を作付ける場合は、各地域で病害虫被害の少ない品種を選定する。	1			
種子消毒	農薬の使用方法を厳守して、塗抹処理や粉衣処理による種子消毒を必ず実施する。	1			
作期の移動 近年の気象変動に鑑み、長雨や病害虫の被害を回避するため、可能な範囲で作期を移動する。	品種の播種晩限を考慮し、可能な範囲で播種を遅らせる。この場合、生育量確保のため播種量を増す。	1			
雑草の抑制－１（播種前～播種期） 雑草との競合を避けるため、斉一な出芽とダイズによる被覆をうながし雑草の生育を抑制する。	耕うん・整地を丁寧に行い、ほ場表層に大きい土塊が残らないようにする。	1			
	適正な播種量を確保する。	1			
	狭畦栽培としてダイズによる早期被覆をはかる。その場合は蔓化や徒長を避けるため、播種時期を早めない。	1			
雑草の抑制－２（生育期） 後発雑草を抑制するための管理を行う。	初生葉展開期に１回目の中耕作業を行う。	1			
	第１～２本葉展開期に中耕・培土作業を行う。	1			

	除草剤を使用する場合、優占草種に応じた薬剤を用いる。	1			
発生予察	病害虫発生予察情報の入手やフェロモントラップなどの予察資材を用いて発生動向を把握し、防除要否の判断及び防除時期の決定を行う。	1			
病害防除および罹病株の除去	（１）罹病株の除去 ウイルス病や茎疫病、黒根腐病など、発生源の除去を速やかに行う。 被害株の早期発見につとめ、抜き取り・ほ場外での処分を適切に行う。	1			
	（２）早期防除 べと病、葉焼病など、まん延の速い病害は、初発を確認したら直ちに薬剤散布を行う。	1			
食葉性害虫の防除 ほ場の観察を注意深く行って発生の兆候を見逃さないようにし、早期発見・早期防除につとめる。	卵塊や群生している若齢幼虫群を除去する。	1			
	発生初期の捕殺につとめる。	1			
	薬剤を用いる場合、クモ類やハチ目・コウチュウ目昆虫などの天敵に対する影響が小さい薬剤を選択する。	1			
鞘・子実害虫の防除	ダイズサヤタマバエ、シロイチモジマダラメイガ、カメムシ類などの鞘・子実害虫防除のため、適期に防除を行う。	1			
収穫・乾燥	紫斑病・腐敗粒の対策として、成熟後、速やかに収穫・乾燥を行う。	1			
罹病残渣の除去 次作への伝染源をほ場に残さないようにする。	収穫後、罹病残渣を集めてほ場外へ搬出するか、トラクタ等で土中深くすき込む。	1			
作業日誌	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等、上述のＩＰＭに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
		合計点数	0	0	